大学生の SNS 利用におけるネガティブな体験

ストレス反応との関連の検討

○西村洋一¹・東海林渉²・井口彰子¹ (非会員)

(¹北陸学院大学・²東北大学)

キーワード: ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS), ネガティブ体験, ストレス反応

The negative experiences in the use of social networking services among Japanese college students

Youichi NISHIMURA¹, Wataru SHOJI² and Akiko IGUCHI^{1,*}

(¹Hokuriku Gakuin University, ²Tohoku University)

Key Words: social networking service, negative experiences, stress response

目 的

ソーシャル・ネットワーキング・サービス (以下, SNS) は, 若者を中心に, インターネット上で積極的に利用されるサービスの一つである。他者とコミュニケーションを取るための便利なサービスとして利用されており, その利用の結果, 既知の人間関係を強める働きも見られる。

しかし, その一方で SNS を利用する中での対人関係上のトラブルやストレスを経験することもまま見られる。東海林・西村・井口 (2014) では, 大学生を対象に聞き取り調査を行い, SNS を利用する中での否定的体験 (「SNS を利用しているときに感じた否定的な感情について」, 「SNS を使ったやりとりで困ったことや悩んだこと」, 「他者が経験した SNS 上でのネガティブなできごと」) を尋ねた。KJ 法による分類の結果, その体験は「つながり過ぎ」「つながっている」「つながっていない・つながれない」といった中で経験されており, 既知の他者との関係の中でつながりが切れないという難しさやインターネットを介したコミュニケーションの困難さといった点が多く見受けられた。それと同時に SNS の機能的特徴が関係の有り様を複雑化しているという点も見出されている。

本研究では, 東海林他 (2014) を参照しながら, 大学生の SNS におけるネガティブな体験の頻度を定量的に調査し, その内容を分類した上で, ストレスとの関連性を検討する。

方 法

調査対象 大学生および短期大学生男女 824 名に調査を実施した。調査会社 (株式会社マクロミル) のモニターを対象に, まず, 普段 LINE, Twitter を普段利用していることを条件にスクリーニングを行い, どちらもアカウントを持っていると回答した者を対象に調査を実施した。最近 3 ヶ月における LINE および Twitter の 1 週間あたりの利用日数と 1 日あたりの利用時間を尋ねたところ, LINE は平均 6.4 日 (SD=1.4), 平均 2.5 時間 (SD=3.4), Twitter は平均 6.4 日 (SD=1.4), 平均 2.4 時間 (SD=2.9) となっており, 全体にどちらのサービスもよく利用していた。なお, 最近 3 ヶ月で LINE も Twitter も利用していないと回答した 1 名のデータを削除した。

調査時期 2015 年 2 月 26 日と 27 日の 2 日間で実施した。

調査内容 SNS におけるネガティブ体験尺度 東海林他 (2014) による聞き取り調査で得られた逐語に基づいて項目化を行った。候補となった項目 (78 項目) について筆者らで取捨選択を行い, 最終的に 58 項目を使用することとした。個々の項目について最近 3 ヶ月でどのくらい体験したか, (1) 「まったくなかった」から (5) 「しばしばあった」の 5 件法で回答を求めた。 **心理的ストレス反応尺度 (SRS)** 鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野 (1997) により作成されたストレス反応を測定する尺度であり, 「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の 3 つの下位尺度を持つ。18 項目について 4 件法で回答を求めた。 **SNS・インターネット利用状況** SNS やインターネットの利用状況, 経験年数を尋ねた。

結果および考察

58 の SNS 利用におけるネガティブ体験の経験率を見るために, 「たまにあった」よりも多い頻度で経験していた割合を算出した。Table 1, 2 に経験率の高い体験, 低い体験を示した。返信をするか否かの判断を迫られることや情報が過剰に入ってくることで, 文字でのコミュニケーションによる負担といったことについての経験率が比較的高かった。

Table 1 経験率の高かった体験

項目	平均	SD	経験率
読むと返信をしないとイケない可能性があるので, メッセージを読むかどうか迷った。	3.2	1.3	71.2
自分に興味のない情報が多数入ってきた。	3.1	1.2	67.9
相手がメッセージを読んだかどうか何度も確認してしまった。	2.8	1.2	60.6
自分が見た時はやりとりがすでにたくさん行われているため, 話題に入っていくことができなかった。	2.7	1.1	59.7
SNS で文章でやりとりするのが面倒に感じた。	2.6	1.3	54.3

Table 2 経験率の低かった体験

項目	平均	SD	経験率
相手から一方的にブロックされて, 連絡も取れなくなった。	1.6	1.0	17.1
普段自分の接している仲間のグループが SNS 上にあるが, 自分は招待されなかった。	1.7	1.0	17.0
相手から一方的に言いたいことを言われたが, その後ブロックされて言い返すこともできなかった。	1.5	1.0	16.8
友人や知り合いの情報を SNS に書き込んでしまい, 文句を言われた。	1.6	0.9	16.3
SNS 上で参加していたグループから外されてしまった。	1.5	0.9	14.5

次に, ネガティブ体験について因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った。その際, 経験率の低い項目 (11 項目) は分析に含めず 47 項目を用いた。スクリープロットの推移や MAP の結果を指標とし, 解釈可能性も考慮した上で, 4 因子解と判断した。第 1 因子は「SNS 利用による対人関係の混乱」, 第 2 因子は「SNS の機能が增大させるコミュニケーションの困難さ」, 第 3 因子は「文字を基本としたコミュニケーションによる反応の弱さに対する戸惑い」, 第 4 因子は「つながることによって目にするメッセージへの懸念, 負担感」と解釈した。

各因子の因子得点とストレス得点との関連を検討するために相関係数を算出し, Table3 に結果を示した。いずれの因子についてもストレス反応との間に中程度から弱い有意な関連が見られた。この結果より SNS 利用によるネガティブ体験が大学生のストレスを高める可能性が示されたと考えられる。

Table 3 SNS 利用におけるネガティブ体験とストレス反応

	SRS 全体	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力
第 1 因子	.35***	.38***	.27***	.31***
第 2 因子	.39***	.34***	.34***	.38***
第 3 因子	.36***	.34***	.31***	.34***
第 4 因子	.39***	.39***	.35***	.35***

*** $p<.001$